

The developmental process of person perception in preschool children : Effects of interpersonal attraction on inferences others personality traits

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6268

幼児期における対人認知構造の発達過程

—対人魅力が内的特性判断に及ぼす影響—

池上貴美子, 中塚智佳野*

The developmental process of person perception in preschool children : Effects of interpersonal attraction on inferences others personality traits.

Kimiko LKEGAMI, Chikano Nakatsuka

幼児は成長の過程で、初期の家庭内の親子関係から次第に幼稚園や保育園での仲間や教師との関わりを体験する。友達と出会い相互交渉を開始し、遊びを楽しんだり、いざこざを経験する中で、どのように他者の性格を認知し理解するのだろうか。この問題は幼児期の発達を支援する上でも重要なテーマとなる。

<対人認知過程>

我々は日常において人と様々な相互作用を営んでいるが、他者との関わり—対人関係—は、相互に相手をいかに認知しているかという認知内容によって左右される。我々はいずれの関係においても、相手の性格を推測し、自分の性格に合わせた関係を続けている(松井,1990)。相手が「どのような人か」を認知し、互いに相手の言動や容貌などから、その相手の感情、動機・意図、パーソナリティ特性を推測し、全体像を作り上げていく。このような認知の諸過程は対人認知 (person perception) といわれ(岡,1990)、この時認知された判断基準、評価基準が相手とのその後の接し方を決める対人関係の重要な入り口となる(松本,1983)。この対人認知が幼児期からどのような過程を経て発達するのか、その機構を解明することが待たれている。

対人認知—相手がどのような人であるかを知ろうとするプロセス—においては、まず身体的特徴から得る認知 (第一印象) を基に印象形成

を行い、相手との相互交渉を通して、内的な性格特性 (以下、内的特性) を修正しながら次第に他者像を明確にしていく。印象形成とは順に入手する情報から他者についての認知を形成する過程である。ただし、内的特性は、身体的特徴と異なり、直接目には見ることができない。

ではどのようにして他者の内的特性は把握されるのか。私たちが直接知ることができるのは、対象人物の行動であり、行動それ自体に「優しい」や「知的」や「冷たい」という内的特性のラベルが明示されているわけではない。直接知覚する対象の背後に安定した内的特性 (内的属性; 意図や性格など) を想定・推測し、対象の行動の原因をそれに帰する心理メカニズムにより認知する(村田,2004)。私たちは他者の振る舞い・会話など外に現われた行動を観察し、それが行為者の安定した内的属性によると判断するという原因帰属を行なっている。こうした他者の行動の因果関係をめぐる解釈の認知過程を帰属過程という(生熊,1983)。

<幼児における対人認知帰属過程>

幼児も成人と同じような対人認知を行なうのだろうか。林(2004)によれば、成人は「経時的安定性」(多少の変化はあっても時間経過による変化は一貫している)、「通状況の一貫性」(多少の変化はあっても、ある場面や状況ではかなり共通した特徴がみられる)、「因果性」(行動の原

因として性格を理解している)をもつ構成概念として性格を理解しているとされる。

幼児については先行研究から、幼稚園年長児(5~6歳児)で性格の理解がなされるが、研究で使用された特性用語が「援助」「信頼」「好意的」「寛大」「意地悪」「利己的」「優しい」など、向社会的行動特性に偏ってきたことが指摘されている。

林、Yuill(1992)は、性格特性用語には「寛大」「親切」「援助的」などの社会的意図を示す用語と、「勇敢」「悲観的」「不安」などの内的状態を示す用語の2タイプがあり、前者は後者に先立って理解されることを示した(林,2004)。

ジョーンズ(Jones,E.E.)らは行為者の意図と、それに対する知覚者の推測との一致度が高くなる条件を明らかにし、社会的に望ましいとされる行為よりも、社会規範から逸脱しているような行為の方が、行為者の意図を推測するのが容易であると指摘した(神田,1990)。

江川(1975)によれば、幼児はパーソナリティの認知というよりは一種の印象形成に似たかたちで感覚的、表面的、断片的に周囲の人々の特徴を理解しているという。4歳から年長になるとある特定の友達を好むようになり、「○○先生は優しい」「○○ちゃんは意地悪」「泣き虫」などと明確にとらえることがある一方で、見知らぬ人に食物や玩具をもらおうと「いい人」だと判断して安心して一緒にいていくなど、幼児の認知は表面的で、本質・実態を見抜けないこともあるとされる。

一方、松永(2002)は、幼児も大人と同様に、他者の過去の行動から自発的に内的特性を抽出して、行動を予測したり内的特性を推測しながら他者を見ること、幼児が単に他者の行動そのものを見るのではなく、そこから他者の行動傾向や内的特性を推測することを示唆した。幼児は、特定の他者の行動を、「具体的な行動」としてそれぞれの内容を記憶するのではなく、その行動から一般的な特性(ネガティブ特性かポジティブ特性)を抽出し、他者の一連の行動をその両極の特性に帰属させて記憶し、それに基づ

いて他者の内的特性を把握することを示唆した。その上で松永は、特性の一般化の方向(ニュートラル特性などの側面)を検討すること、また内的特性判断に関わる多様な要因(頻度、新近効果、他者の行動の質や、状況、子どもの類似体験など)の分析を今後の課題として指摘している。

林(2004)によれば、Smetana(1981,85)は幼児が他者の性格を、どのような性格特性 personality trait 用語を使って評価しているのかについて検討し、慰める行為には「良い」、傷つける行為には「悪い」という「良い—悪い」の評価が年少児までにでき、「良い—悪い」の評価が他者の性格を理解する上で重要であることを示した。また幼児は他者の性格を良い方に理解するポジティブバイアスをもつため、良い側面と悪い側面の理解は発達の異なることを示唆した。「特性」の理解は「次元」の理解と密接に関連しており、例えば「良い」特性の理解は少なくとも「良い—悪い」という一次元の部分的な理解を意味しているという。林は、子どもが加齢と共に使用する対人認知次元(知的評価、力量の次元)が増加する一方で、社会的評価の次元は減少することを指摘している。林は、成人の性格が5つの次元で過不足なく記述可能だとするビッグ・ファイブ説に注目し、成人の他者についての認知においては外向性次元(外向性特性—内向性特性)、愛着性次元(愛着性特性—分離性特性)、統制性次元(統制性特性—自然性特性)、情動性次元(情動性特性—非情動性特性)、知性次元(知性特性—非知性特性)の存在が共通に見出されることを報告している。この点は今後の幼児期研究における内的特性の多様な次元についても示唆するものが大きい。林は先行研究を引き継いで質問紙調査により、小学4年生以上からビッグ・ファイブ概念が理解されること、子どもは年少の頃から「良い—悪い」という全般的評価語を使い、幼稚園年長頃から性格特性概念の獲得が始まり、小学校高学年で成人と同様の性格特性/次元概念であるビッグ・ファイブが獲得されることを

明らかにした。またその獲得過程について、幼児を対象として、ビッグ・ファイブ仮説に基づく行動予測法を用いた性格特性概念についての理解内容に関する発達モデルを検討した。その結果、幼児が年長頃から全般的な「良い」次元を内容とした性格特性／次元の概念を獲得し、発達に伴い特性／次元を分化させ、最終的に小学校高学年頃に大人と同様のビッグ・ファイブ概念を獲得する発達モデルを示した。つまり、単にポジティブバイアスのみで対人理解をしているのではなく、すでに理解している「良い」次元を起点として様々な性格特性を考慮した対人理解能力が発達することを示唆した。

清水(2003)によれば、成人は「性格特性は特定場面を越えて一貫した行動の原因となる」との概念をもつが、先行研究から、年少児も「親切的な」「意地悪な」という特性用語の語彙はもつものの、その自発的使用は6～9歳であり、就学前児においては、特性が特定場面を越えて一貫した行動の原因となるとの理解は未成立とされた。これに対し、清水は、先行研究における「特性→行動」のみの因果関係の分析よりさらに進んで、「特性→動機→行動」の分析、つまり幼児が動機と一致した特性をラベリングし、さらにラベリングした特性を行動予測に用いる〔物語の動機—特性のラベリング—他場面における行動の予測〕がすべて一致している推論を行なうことができるかを検討した。その結果「特性—動機—行動」の因果関係の理解は3・4歳から可能になるが、年長からより確実性を増すことを示した。また特性が特定場面を越えて一貫した行動の原因となることは、年長から理解し始めるが、6歳頃から複雑な場面においても理解可能となることを示唆した。また清水は子どもの誤回答のほとんどが行動予測課題において、日常的に要求される向社会的行動を回答したものであり、ポジティブバイアスによることを報告している。ここでも今後「良い—悪い」の評価的価値を含まない特性を扱う必要のあることが示された。

また清水(2003)は従来の行動予測パラダイムを用いた研究では、ターゲット人物のパーソナリティ特性を表す行動が一つしか呈示されていないことから、複数の行動の呈示を提起した。

以上から、就学前児においても他者の内的特性の推論が可能であり、それらの特性がある程度一貫しており、「良い—悪い」のような評価的価値を含む特性は早い段階から理解しやすい可能性があること、幼児期では他者の内的特性認知においてポジティブバイアスや情報呈示の新近効果の影響があることが明らかにされた。

本研究では、幼児が、どのようにして他者の行動からその内的特性を推測・把握するのかという対人認知的評価を検討する。また今後の課題とされた、評価的価値を含まないニュートラルな行動をも呈示し、それを幼児がどのような内的特性に帰属させるのかを分析する。合わせてポジティブバイアスや新近効果の影響についての検討を行なう。その際、清水(2003)の指摘に従い、ターゲット人物の行動情報量(物語の内容の種類)を増やすこととする。

<対人認知が及ぼす対人間相互作用への影響>

行動の原因が行為者の内部にあるとみなす原因帰属においては、知覚者の個人的欲求や相手に対する期待により対人認知が歪められたり、論理的に誤ることがあるだけでなく、一度原因帰属がなされるとその影響のもとに他者に対する行動がとられることがある。

原(1997)は幼児の対人認知において、他者に対する親密度の要因について分析をしている。同性のクラス仲間の中でお互いに仲良しの友達として選び合っている者を「友達」とし、それ以外を「知っている子」として、「友達」が遊び場面、援助場面、信頼場面で、自分と「知っている子」に対してどのように振る舞うか行動予測をさせた。その結果、幼児は「友達」が「知っている子」よりも自分に対して好意的に振る舞ってくれると予測した。これは従来の幼児期の友人関係における親密さを度外視する知見を覆すこととなっ

た。つまり幼児も友達に対して親密さに基づく好意的行動を期待し、友達の行動が一般的な行動特性から引き起こされるのではなく、自分と友達との間の友達関係から出てくる可能性があることを示唆した。

相手に対する期待は対人行動を通じて相手にも影響を及ぼし、一方、知覚者自身の期待が、先入観・偏見を生じさせる原因ともなり、それに伴う行動を生起させることになる。対人認知における帰属過程の分析は人間関係の理解にとって不可欠といえる(生熊,1983)。そこで人間関係を円滑にし、トラブルを避けるためには、知覚者の対人認知における歪みを無くし、他者を正確にとらえることが必要とされる。

我々は人を知覚する際、前提となる自分自身の知識や経験の体系に基づいて、相手を理解し性格特性を把握している。例えば「ある人がAという特徴をもっていれば、同時にBという特性も持っているはずだ」と、過去の経験から自分なりの関連づけを行なっている。認知者側の経験により形成されたパーソナリティの特性間あるいは外見や行動とパーソナリティ特性との関係についての認知システムを「暗黙のパーソナリティ」という(榎本,2004)。つまり日常生活の中で、人を知覚する際の前提となる知識や体系である。このシステムは乏しい手がかりから他者のパーソナリティを推測するのに有効であるが、パーソナリティの認知の歪みを生じさせる原因となる。暗黙のパーソナリティ観は、個人的経験をもとに推測が起きるときには個人により内容が異なるが、ステレオタイプのように多くの人に共通して見られ、他者のパーソナリティ認知に影響するものもある(山本,2000)。例えば代表的なものには、容貌・体型・美醜など外見的特徴に結びついたステレオタイプや社会的役割に関するステレオタイプがある。

特に外見的特徴を扱った先行研究では「美しい人はそうでない人に比べて、様々な側面で好ましい特徴を持っていると思われやすい」という「身体的魅力によるステレオタイプの効果

Effect of Physical Attractiveness Stereotype」と呼ばれ、容姿に伴う一種の偏見とも捉えられている(Dion et al.,1972)。

Dion et al.(1972)とDion(1973)は「一般的に容姿が美しいと人柄も良いと思われやすい」という「美しい人=良い人」ステレオタイプ(美ステレオタイプ Beauty is good stereotype)が年長児のみならず年少児にも認められることを明らかにした。3~6歳児は「可愛い顔の子どもはそうでない子どもより、他の子をいじめたり、たたいたりしないで他人に優しい」と、可愛い顔の子どもの内的特性をそうでない子どもよりも良い方向に判断しがちで、友人としてもかわいい顔の子どもを選ぶ傾向が強いという結果を示した(松井,2001)。

このように、幼児期から「美ステレオタイプ」が他者の内的特性の判断に良くも悪くも影響を及ぼし、それによって認知された内的特性がその後の相互作用に影響を及ぼすことが示されたが、この点について更なる検討を行なう。

その際、先行研究でターゲット人物が矛盾した行動を行なう(例えば先行刺激ではポジティブ行動を行なった人物が、テスト場面ではネガティブ行動を行なうなど)ジレンマ課題を用いて、ターゲット人物の未来の行動を予測させる行動予測法を施行したのにならぬ、本研究では「美ステレオタイプ」に一致した内的特性をもつ人物と、「美ステレオタイプ」と矛盾した内的特性をもつ人物を呈示することにより、幼児期における内的特性判断が、外見と行動情報のどちらの影響を受けるのかについて検討する。

<対人魅力・対人好悪感情と内的特性>

人間関係を展開する上で、相手に対して持っている感情は、その人の行動を受け入れる場合にも、その人に対してある行動を行なう場合にも、常に大きな影響を与える要因となる(斎藤,1987)。特に対人関係を発展させるためにはお互いが相手に魅力を感じ、好意をもてることが重要となる。他者に対する好悪感情はその他

者に対する自身の行動を大きく決定づける。例えば好きな相手からの援助行動に対しては喜び、感謝し、より一層の好意を抱くのにに対し、嫌いな相手からの援助行動は気味悪く感じられたり、援助されて悔しいとの感情を引き起こしたりする。相手への好悪感情により同一の行動を受けても異なる情緒を感じ、対処法も異なり、嫌悪を感じる他者に対しては、その行動に嫌悪感が先立ってしまい、相互交渉を通して二者関係を発展させるのには大きな障害となる。

他者に対する好意的認知・非好意的認知は対人魅力 interpersonal attraction が関係している。対人感情の決定要因としては主に相手の特性、相手の行動特徴、自己の特性、自己の行動特徴、相互的特性関係、相互作用、環境要因が挙げられる(斎藤,1986)。この中でも対人魅力に大きく関係するのが相手の固有特性、相手の行動特徴の「他者要因」であろう。相手のある状況での働きかけや行動特徴が対人感情の決定因となる。例えば自分をほめてくれた人、高く評価してくれた人に好意をもつようになる。他者要因のうち身体的魅力や性格特性のように、他者の固有の特性が好ましくあれば魅力を感じ、好意を抱きやすいとされ、好悪の決定因や好悪感情下の相互作用の機構を解明することが待たれている(斎藤,1987)。

Anderson(1968)の大学生対象の調査から、好まれる性格の上位5位は誠実・正直・思慮・忠実・信頼であり、嫌われる性格としてはうそつき・だましや・けち・冷酷・不正直であることが示されている。松井・山本(1985)も魅力を感じる異性の性格特性として、男女共思いやり、優しさ、生き生き、明るさなどをあげている。ただし身体的魅力と性格の魅力のどちらを重視するかは、個人差があるとされる(斎藤,1987)が、外見美の評価と性格の評価に順序をみとめる先行研究もある(松井,2001)。

松井(2001)によれば、松井・山本(1985)や広沢(1994)は、外見美の評価と性格の評価が、別々に好意に影響すると考えるが、垣内(1996)は外

見美の評価が好意度を介して性格の望ましさの評価に影響すると考える。松井らは外見情報から外見美の評価と性格の評価の2つの評価が生まれ、2つの評価が同時に好意度に影響すると想定するのに対して、垣内は、外見情報から外見の美しさが評価され、外見が美しい人に好意を感じ、好意が性格の評価に影響するという順序を示した(Fig.1)。この2説の過程について後続の研究ではそれぞれを支持する結果が出されており、両者一致した結論は得られていない。

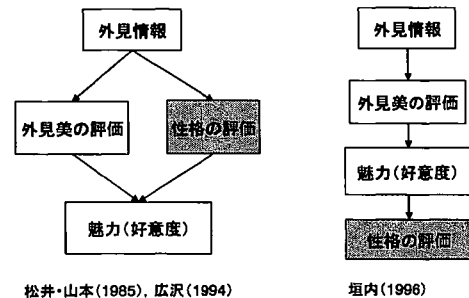


Fig. 1 対人認知構造(松井, 2001)

そこで本研究では先行研究で未だ明らかにされていない幼児期における対人魅力・対人好悪感情の決定因が、美しさなどの外面的要因と、性格特性などの内的要因のいずれが重要な要因となるのか、対人認知における感情的評価、つまり好悪感情の決定因を検討する。その際、好悪感情下での相互作用の違いも合わせて分析する。そこから議論の段階である「外見美の評価と性格の評価の順序」について、一考察を試みる。

目 的

本研究では、年少児と年長児を対象として、幼児期における対人認知構造の発達過程について次の6つの仮説を検討する。

仮説① 先行研究より、年少児でも他者の内的特性を理解していることが示されたが、年長

になるにつれてその理解が向上するだろう。
 仮説② 幼児は「美ステレオタイプ」をもち、それが内的特性判断（認知的評価）や対人感情（感情的評価）や対人関係（行動的評価）に影響するだろう。

仮説③ 幼児は「美ステレオタイプ」をもつが、内的特性理解が向上した年長児は年少児よりも他者の認知的評価において、外見の魅力による影響、与えられた行動情報から正確な内的特性を帰属させるだろう。

仮説④ 感情的評価について、年少児における対人好意感情の決定因は、性格特性などの内面的な要因よりも、美しさなどの外面的な要因が重要な決定要因となるだろう。一方、内的性格特性理解が進展した年長児における対人好意感情の決定因は、美しさなどの外面的要因よりも性格特性などの内面的要因がより重要な決定因になるだろう。

仮説⑤ 行動的評価について、年少児における対人関係(相互作用)においては、内的特性よりも、美しさなどの外面的な要因が影響するだろう。一方、内的特性理解が進展した年長児における対人関係においては、外面的要因よりも内面的要因がより影響を及ぼすだろう。

仮説⑥ 幼児期における行動的評価には、好悪感情が強く影響するだろう。

これらを総合した上で、外見美の評価と性格の評価のモデルについて発達的に検討する。

方 法

1 予備調査Ⅰ

目的 本調査に使用する人物刺激の作成

対象児 金沢市内の保育園男女児各 5 名

刺激

①顔刺激の作成 Bradshaw & McKenzie(1971)の「目、鼻、口の変化によって作られた 16 種類の比較刺激および標準刺激」などを参考にして男顔・女顔のそれぞれの顔刺激を独自に作成。

②髪型・服装刺激の作成 子どもたちが普段描く人物画、子供雑誌、幼児に人気のあるアニメ

キャラクター、子ども服のカタログなどを参考に独自に作成。

手続き 他児の影響を避けるため個別に面接。

質問 1 男児（女児）に「どの子が一番かっこいい（かわいい）？」「どの子が一番好き？」と外見美の判断と好意感情を尋ねた。

本調査用刺激材料の作成

男女それぞれで好ましいとされた各パーツを組み合わせた人物を「身体的魅力が高い人物 (attractive;以下A)、好ましくないとされたパーツを組み合わせた人物を「身体的魅力が低い人物 unattractive;以下U」とし、A、Uそれぞれ 3 人物を独自に作成。刺激作成後 A、U とされた人物画について再度聴き取り調査で追認。

質問 2 男女児に対して「この子どう思う？」

「この子好き？」と尋ねた。

結果 A 人物とされた絵に対しては「かわいい」「かっこいい」「好き」「上手」との評価、U 人物とされた絵に対しては「変な人」「かわくない」「やだ」との評価であったため、これらの絵刺激を本調査で使用することとした。

2 予備調査Ⅱ

目的 本調査に使用する物語り刺激作成のためポジティブ行動、ネガティブ行動の評価基準を決定する。

手続き 本調査で呈示するターゲット人物の内的特性を反映する行動情報は、一般的に好ましいとされる性格特性（ポジティブ特性；以下 P と表記）、好ましくないとされる性格特性（ネガティブ特性；以下 N と表記）、また松永(2002)で今後の課題としてあげられた評価的次元（例えば P/N）でなく、かつ社会的規範を含まない特性（ニュートラル特性；以下 T と表記）という異なる 3 特性を反映する行動を扱った。P か N かの判断は、行動予測法による先行研究(松永、1995,2002)と和田(1996)が作成した Big Five 尺度、Anderson(1968)の性格特性の好意度順位を参考にした。

具体的な行動の内容はP度-N度が評価の中
立点から同程度離れた極端さを持つこととし、
心理学コースの学生3人で評定（一致率;.91）
を行なった。その上で、幼児によくみられ、か
つ幼児にもわかりやすい行動にすべく、保育園
の先生方からの指導を受け修正を加えた。

清水(2003)の指摘に従い、ターゲット人物の
行動情報の量を1つの場面でなく3～4場面に
増やし、また1つ1つが途切れた場面でなく内
容につながるのある3～4場面として、P行動、
N行動、T行動をそれぞれ独自に作成した。

3 本調査

被験児 金沢市内の2か所の保育園児計98名
年少児47名（男児27名、女児20名；3歳8カ
月～4歳8カ月、平均4歳0カ月）、年長児51名
（男児29名、女児22名；5歳8カ月～6歳8カ
月、平均6歳1カ月）

調査時期 2004年11月～12月

刺激材料 予備調査より作成された6人（3対
のA、U）の人物刺激に3種の内的特性（P、
N、T）を表す行動を組合せ、6パターンの特
ターゲット人物を設定した(Fig.2)。

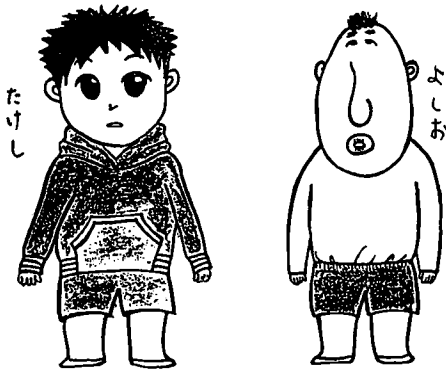


Fig. 2 物語Ⅱ登場人物（男児用）

物語Ⅰ：AP-UN，外見の魅力的な子Aが良
い行動P（先生がつれてきた小さい組の子に自
分の玩具を提供して遊んであげる）を行い、外
見の魅力的でない子Uがいやな行動N（その小

さい子を攻撃し、泣かせる など)をする
物語Ⅱ：AN-UP，外見の魅力的な子Aがい
やな行動N（友達とトンネルを作る時、友達を突
き飛ばし場所を占有）をし、魅力的でない子Uが
良い行動P（砂場セットを運んできたり、仲間に
「入れて」と言われると快諾する など）を行な
う

物語Ⅲ：AT-UT，魅力的な子Aも魅力的で
ない子Uも同じ中立的な行動T（折紙をおる、給
食を食べる 歌を歌う）を行なう

各物語の絵カードは着色した。物語は紙芝居形
式とした。物語ⅠⅡではP/Nを同時に呈示さ
せることにより魅力度がぼやけないようにした。
手続き 1つの物語につき以下の1～4の課題
を1セットとし、1人3セット行なった。各物
語はランダム順に呈示された。

1. 対人感情課題① <第一印象>

2人の登場人物を並べて呈示し(Fig.2)「○○
ちゃん（被験児名）はどっちの子が好き？」と
第一印象における好悪感情を尋ねた。次になぜ
その人物に好意を感じたか理由を尋ねた。

2. 内的特性判断課題<認知的評価>

「今からこの2人がでてくるお話をします。
お話が終わったら○○ちゃんにいろいろお尋ね
するから、よく聞いてね。」と教示し、紙芝居を
提示した後、「今のお話聞いて、○○ちゃんはA
人物（U人物）ちゃんのことどんな子だと思っ
た？」と2人の登場人物の内的特性を、自発的
な言語反応により尋ねた。次に、「○（アンパン
マン-幼児の世界では善い人物として代表化さ
れる）」、「×（バイキンマン-意地悪な人物）」、
「?（真顔-中立ニュートラル）」の3つの絵カ
ード(Fig.3)により内的特性を判断させた。内的
特性絵カード選択後、選択の理由を尋ねた。各
人物について尋ねる順序はランダムとした。

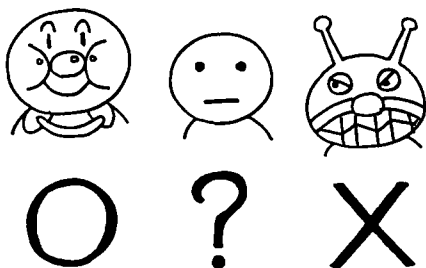


Fig. 3 内的特性判断課題 絵カード

3. 対人感情課題② <感情的評価>

「もう一度教えてね。〇〇ちゃんはどっちの子好き？」と対人感情とその理由を尋ねた。

4. 対人関係選択課題 <行動的評価>

各登場人物とどの位遊びたいか、を絵カードにより、すごく遊びたい(5点)・遊びたい(4点)・わからないーどちらでもない(3点)・遊びたくない(2点)・絶対遊びたくない(1点)の5段階で評定させた後、その理由を尋ねた。各人物について尋ねる順序はランダムとした。

結 果

1 対人感情課題① <第一印象>

第一印象における感情的評価は Fig.4 に示すように両年齢において全ての登場人物ペアにおいて外見が魅力的な人物Aに対する好意が高く χ^2 検定の結果有意であった ($p<.01, df=1$)。外見が与える印象が、対人魅力、対人好意感情に強く影響することが示された。感情的評価の理由づけについては、松永(2002)を参考にカテゴリー化した結果、年少児では約7割、年長児では約4割が無回答であったが、回答が得られた児の内、少数ではあるが第一印象においても内的特性を推測（「やさしそうだから」）する美ステレオタイプ(Dion,1973)が示唆された。

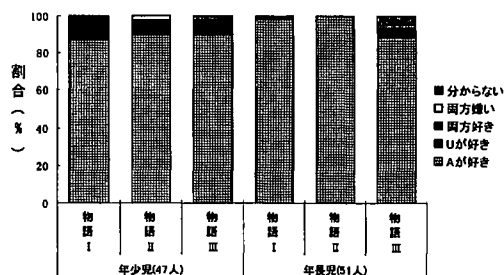


Fig. 4 対人感情課題①

2. 内的特性判断課題<認知的評価>

①言語反応による内的特性判断（認知的評価）

言語反応は松永(2002)を参考にカテゴリー化した。年少児においては全物語で言語化出来ない者が約7割以上を占め、言語化された内容の中では内的特性が多かった。年長児は物語 I II においては内的特性が最も多かったが、物語 III については無回答が多く、言語化された場合は内的特性が多かった。P/Nの評価の価値基準を含む物語 I II においては、年長になると、他者について認知した内容を、他者の行動そのものでなく、行動から帰属させた「優しい」「いじわる」「悪い」「いい子」などの内的特性語を用いて表現できた。しかし年少児では「どんな子だった？」の問いかけに対し無言になることが多く、言語化できず刺激の紙芝居を指差し「これ」と答えることが多かった。 χ^2 検定より物語 I II の全ての登場人物において年長児が年少児よりも有意に内的特性の発話が多かったが ($p<.01, df=1$)、物語 III においては年齢差はなかった。全物語において外見美の違い(A/U)による内的特性の言語化人数に差はなかった。両年齢共身体的特徴や行動への言及は少なく、他者の行動を示された直後には、幼児は身体的特徴や行動そのものよりも内的特性に言及することが明らかになった。

②特性把握絵カード選択による内的特性判断（認知的評価）

各物語における内的特性絵カード判断の正答と準正答を Table 1 に示した。Fig.5 に各物語にお

ける正答、準正答、誤答の生起率（生起人数／総被験児数）を年齢別に示した。この結果より、正答と準正答を含めた正答生起率は両年齢共物語Ⅰが多く、物語Ⅲは少なかった。年齢差をみると、全物語において、年少児より年長児が正答者が多かった（物語Ⅰ： $\chi^2(1)=47.078, p<.01$ ）。特に物語Ⅱにおいては、正答は年長児が有意に多く、誤答は有意に少なかった（ $\chi^2(1)=18.312, p<.01$ ）。年少児では正答と誤答の生起人数に有意差はみられなかったが、年長児では、正答者が誤答者よりも有意に多かった（ $\chi^2(1)=39.705, p<.01$ ）。しかし物語Ⅲにおいては年少・年長共、正答者よりも誤答者が有意に多かった（ $\chi^2(1)=20.446, p<.01$; $\chi^2(1)=20.446, p<.01$ ）。これらの結果から、年長児は価値的評価(P/N)を含む行動の見られる他者については、その行動から正確に内的特性を帰属させ、また中立的な行動には内的特性を帰属しにくいことが明らかになった。年少児については、中立的な行動と物語Ⅱの登場人物のように美ステレオタイプと矛盾した行動を示す他者については、正確に内的特性を帰属しにくい傾向にあることが示された。

Table. 1 各物語における内的特性絵カード判断の正答、準正答

	物語Ⅰ	物語Ⅱ	物語Ⅲ
正答	A「O」、U「X」判断	A「X」、U「O」判断	A「?」、U「?」判断
準正答	A「?」、U「X」判断 A「O」、U「?」判断	A「?」、U「O」判断 A「X」、U「?」判断	A「O」、U「O」判断

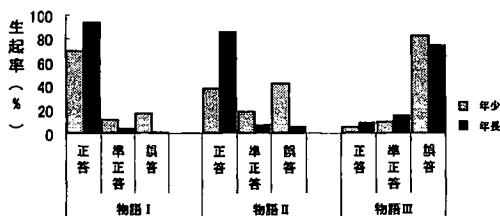


Fig. 5 物語別の回答の年齢差

分析した。その結果年少児の70%は認知的評価の理由付けを言語化しなかったが、言語化された者では内的特性への言及が多かった。年長児では、物語ⅠⅡにおいて、行動への言及が50%を占め、次いで内的特性への言及が多かった。両年齢共、身体的特徴への言及は少なかった。全体的に、年長児においては評価次元を含む行動を表す他者の場合には、他者の行動から内的特性へ帰属させるという認知過程を言語化して説明できるようになることが明らかになった。しかし年少児はこのような帰属過程を言語化することができず、言語化できたとしても内的特性の認知的評価の理由を再び内的特性に帰属させる傾向にあることが示された。

3. 対人感情課題② <感情的評価>

各物語呈示後、「どっちが好き？」と再び登場人物に対する感情的評価(好意感情)を尋ねた。その結果 Fig.6 に示すように、登場人物の特性を付与した行動を呈示した後の対人感情的評価では、物語ⅠとⅢにおいて第一印象と同様に全登場人物ペアにおいて、AがUより好まれた（ $p<.01, df=1$ ）。一方、物語Ⅱにおいては、年少児ではAがUより好まれた（ $\chi^2(1)=9.523, p<.01$ ）が、年長児ではUがAよりも好まれる傾向がみられた（ $\chi^2(1)=2.951, .05<p<.10$ ）。

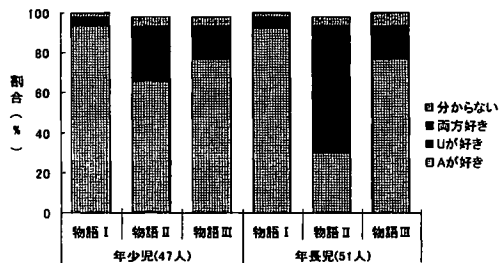


Fig. 6 対人感情課題②

③内的特性判断の理由づけ

特性絵カード選択後に、なぜそう思ったかという理由づけを求め、内容をカテゴリー化して

またその理由づけについては、年少児は全物語において半数以上が無回答で、言語化が難しかったが、言語化された中では身体的魅力への

言及が多かった。年少児では、内的特性を認知した後においても、身体的魅力が対人魅力・対人好悪感情に影響することが示された。年長児においては、物語ⅠⅡにおいては7割以上の者が言語化し、内的特性に言及したものが最も多く、次に身体的魅力であった。

対人感情の変化

物語呈示前後で、対人好悪感情がどのように変化したか（対人感情課題①と②への反応の変化）について分析した結果、物語Ⅱにおいてのみマクネマー法による有意な変化が見られた（年少： $\chi^2(1)=9.0$, $p<.01$, 年長： $\chi^2(1)=26.0$, $p<.01$ ）。具体的には年少児では、Aを好きと答えたものは対人感情課題①では39名(80.85%)で、②になると9名がUに変化した。年長児は①ではAを好きと答えた者は51名(100%)であったが、②になると26名がUを好きと変化した。この変化を年齢間でみると、年長が年少より好意を変化させた度合いが有意に多かった($\chi^2(1)=8.257$, $p<.01$)。物語ⅠⅢにおいては両年齢共、①でも②でもAを好きと答えた。

つまり、幼児は第一印象での対人感情は身体的魅力が高いA外見人物に好意感情をもつが、P/N特性を付与した行動情報を呈示された後の感情的評価では美ステレオタイプと一致する。あるいは内的特性に差がない場合は好意感情は変化しないが、美ステレオタイプと矛盾する行動情報を示されると、U外見であっても内的特性がポジティブな人物に対して好意感情をもつようになり、かつその変化は年少より年長で大きいことが明らかになった。

4. 対人関係選択課題<行動的評価>

登場人物と「どの位遊びたいか」という相手に対する行動的評価について、すごく遊びたい(5点)～絶対遊びたくない(1点)の5段階評価の結果、Fig.7に示すように行動評価得点(遊びたい得点)は、両年齢においてA-P人物が最も高く、U-N人物が最も低かった。年少児では全てのA外見人物に対する得点が、全てのU人

物に対する得点よりも高かったのが、年長児ではU-P人物の得点が、A-N人物よりも高かった。

幼児期において行動評価に身体魅力と内的特性の望ましさがどの程度影響を及ぼすのか、行動評価得点の平均値について年齢(年少, 年長)×外見美(A, U)×内的特性(P, N, T)の3要因分散分析を行なった結果、年齢の主効果はみられなかったが、外見美($F(1,96)=98.645$, $p<.001$)と、内的特性($F(2,192)=58.884$, $p<.001$)の主効果、年齢×内的特性($F(2,192)=6.062$, $p<.005$)、外見美×内的特性($F(2,192)=4.942$, $p<.01$)、年齢×外見美×内的特性($F(2,192)=4.519$, $p<.05$)の交互作用が有意であった。年齢×外見美×内的特性の交互作用に関して、単純・単純主効果の検定を行なったところ、A-N人物における年齢の主効果($F(1,576)=7.695$, $p<.01$)とU-P人物における年齢の主効果に有意な傾向がみられた($F(1,576)=2.855$, $p<.10$)。年少児ではすべての内的特性において、外見美の主効果が有意で(P; $F(1,288)=20.138$, N; $F(1,288)=35.043$, T; $F(1,288)=25.138$, $p<.001$)、年長児においても全特性において外見美の主効果が有意であった(P; $F(1,288)=10.599$, N; $F(1,288)=17.838$, T; $F(1,288)=62.713$, $p<.001$)。年少ではA/Uどちらにおいても内的特性の主効果が有意で(A; $F(2,384)=5.819$, $p<.005$, U; $F(2,384)=12.031$, $p<.001$)、年長でもA/Uどちらの外見でも内的特性の主効果が有意であった(A; $F(2,384)=33.034$, U; $F(2,384)=36.600$, $p<.001$)。ライオン法による多重比較によれば、年少では、A外見のときはP特性のみがN特性よりも行動的評価(遊びたい)が高く($t(384)=3.336$, $p<.05$)、U外見のときはPがNやTよりも高かった($t(384)=4.808$, $t(384)=2.453$, $p<.05$)。年長ではA外見のときN特性はPやTより有意に行動的評価が低く(遊びたくない)($t(384)=7.536$, $t(384)=6.782$, $p<.05$)、U外見のときも同様であり($t(384)=8.572$, $t(384)=2.826$, $p<.05$)かつTがPより有意に低かった($t(384)=5.746$, $p<.05$) (Fig.7 参照)。

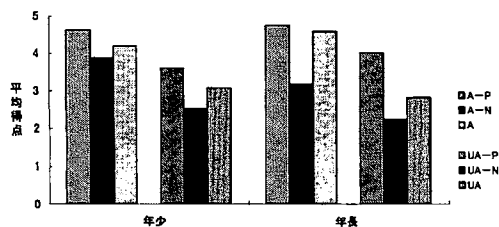


Fig. 7 ターゲット人物 (外見美-内的特性) に対する行動評価得点の平均値

以上より、幼児の対人認知における行動的評価に関して、外見美と内的特性の両方が影響していることが示された。外見美の影響についてはA外見人物に対する行動評価がU外見人物に対する評価より良いことが示された。内的特性が行動評価に及ぼす影響については、P特性に対する行動評価がTやNよりも高かった。年齢については、A外見では、年少児よりも年長児が有意にN特性への評価が低かった。

好意感情と行動的評価得点

対人好悪感情と行動的評価の関連をみるため対人感情課題②で「好き」と回答した人物への行動評価得点と、「好き」と回答しなかった人物への行動評価得点を比較した(Fig.8)。その結果両年齢において好意感情をもつ人物への得点が、好意感情を持たない人物への得点よりも高かった(遊びたい)。行動評価得点の平均値について物語別に年齢(年少, 年長)×選好感情(好き, 好きじゃない)の2要因分散分析を行なった結果、全物語において選好感情の主効果が有意であった(物語Ⅰ; $F(1,91)=192.5$, 物語Ⅱ; $F(1,81)=24.276$, 物語Ⅲ; $F(1,77)=69.84$, 各々 $p<.001$)。

すなわち対人好悪感情が行動的評価に影響を及ぼすことが示唆された。美ステレオタイプに一致する物語Ⅰにおいては、選好感情の違いによる行動的評価点の差が大きかった。好意を持つ他者に対してはより「遊びたい」と評価し、好意を持たない他者に対しては「遊びたくない」と評価し、その傾向は年長児の方がより顕著であった。

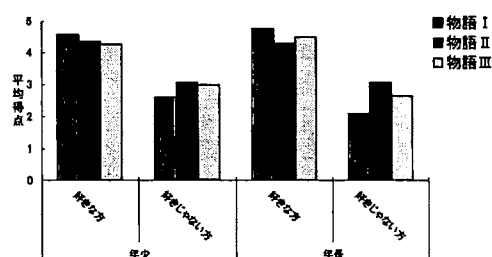


Fig. 8 関係選択課題 好意による平均点の差

次に行動的評価の理由付け(なぜその人物と遊びたい(遊びたくない)か)について、年少児ではほとんど行動的評価の理由付けを言語化できなかった。年長児は内的特性を理由にあげる一方で、思考的発話(「やさしそうで遊んでくれそうだから」「混ぜてあげたら悪いこととして、意地悪してくるかもしれない」「どうせ僕もいじめられる」内的特性から未来の行動を推測)や共感的発話や、身体的特徴についての発話が現われた。A外見人物には「優しいから」とP特性を付与し、U外見人物には「優しいから」「意地悪やった」の両方の特性が付与された。また「遊ばない」と行動評価した人物には「鬼ごっここの時、走るのが弱そう」「こんな子と遊んでもビービー弾探しとかできそうにない」など、登場人物の能力を過小評価する思考的発話がみられる一方で、「遊びたい」と行動評価した人物には「鬼ごっここの時、走るのが強そう」など過大評価による思考的発話がみられた。つまり全く同じ行動を行なう他者を認知するときには、身体的魅力・美ステレオタイプの影響が強まることが示唆された。

考 察

幼児期における対人認知構造の発達について目的であげた仮説との関連から検討する。

1. 認知的評価(内的特性判断)について
<仮説①年少児でも他者の内的特性を理解し、かつ年長になるにつれてその理解が進展する>
幼児が他者の行動から内的特性を推測し、把

握するかについて、結果からP/Nなどの評価的基準を含む行動情報が与えられた場合において、幼児も正確に把握する側面が示されたが、その帰属過程は発達により異なっていた。

まず幼児は、他者の行動を呈示された直後においては、認知的評価（内的特性判断）について、身体的特徴や行動そのものよりも内的特性に言及することを示した。P/Nなどの評価的価値基準が与えられた場面において、年長児が年少児よりも有意に内的特性の発話が多かった。年長児は他者について認知した内容を、他者の行動そのものではなく、行動から帰属させた「優しい」「いじわる」「悪い子」「いい子」などの内的特性語を用いて、自発的に言語化できた。美ステレオタイプに一致した評価価値を含む行動情報が与えられた場面（物語Ⅰ）でも美ステレオタイプに一致しない場面（物語Ⅱ）でも、年長児は年少児より正当者が多く、年長児では美ステレオタイプとの一致・不一致にかかわらず正確な内的特性判断を行なった者が、誤答者よりも有意に多かった。よって仮説①は支持された。ただし評価的価値を含まない中立的な行動情報Tが与えられた場面（物語Ⅲ）では誤答者が正当者よりも有意に多く、また年齢差もみられなかった。

<仮説②幼児は美ステレオタイプをもち、それが内的特性判断(認知的評価)や対人感情(感情的評価)、対人関係(行動的評価)に影響するだろう>

年少児では、美ステレオタイプに一致する評価的価値基準を含む行動情報が与えられた物語Ⅰにおいて他者の内的特性が把握されたが、美ステレオタイプと矛盾する行動情報が与えられる物語Ⅱでは、正当者と誤答者の人数に有意差がなかった。また中立的な行動情報からは、ほとんどの被験児がA外見人物にはポジティブ特性を、U外見人物にはネガティブ特性を帰属させたことから仮説②は支持された。

<仮説③幼児は美ステレオタイプをもつが、内的特性理解が進展した年長児は、年少児よりも

他者の内的特性判断において外見的魅力による影響を受けずに、与えられた行動情報から正確な帰属を行なうであろう>

前述の結果より、幼児の認知的評価においては、行動情報のみから内的特性を帰属させるのではなく、身体的魅力などの外面的要因も影響を及ぼすこと、特に年少においてその傾向は顕著であった。発達と共に美ステレオタイプの影響がみられなくなるが、これは川西(1993)とも一致し、幼児が加齢と共に内的特性の認知・帰属過程を発達させていくためと考えられた。

2. 対人感情(感情的評価)について

<仮説②幼児は美ステレオタイプをもち、それが内的特性判断(認知的評価)や対人感情(感情的評価)、対人関係(行動的評価)に影響するだろう>

幼児は、ターゲット人物・身体的特徴のみを手がかりとする第一印象において、両年齢とも、身体的魅力が高いA人物に好意感情を抱く傾向が見られ、仮説②が支持された。

<仮説④感情的評価について、年少児における対人好意感情の決定因は、性格特性などの内面的な要因よりも、美しさなどの外面的要因が重要な決定因となる。しかし内的特性理解が向上した年長児における対人好意感情の決定因は、美しさなどの外面的な要因よりも、性格特性などの内面的要因が優位となるだろう>

美ステレオタイプと一致する物語Ⅰでは感情的評価は第一印象から変化しないが、美ステレオタイプと矛盾する物語Ⅱでは、有意にU人物へと好意感情が変化する者が多く、年長児が年少児よりも有意に多かった。仮説④は支持された。

3. 対人関係選択(行動的評価)について

<仮説② 幼児は「美ステレオタイプ」をもち、それが内的特性判断(認知的評価)や対人感情(感情的評価)や対人関係(行動的評価)に影響するだろう>

<仮説⑤行動的評価について、年少児における対人関係(相互作用)においては内的特性よりも美しさなどの外面的要因が影響し、内的特性理解が進む年長になると、美しさなどの外面的要因よりも、内的特性が影響するだろう>

幼児期における行動評価に身体的魅力と内的特性の望ましさがどの程度影響を及ぼすかについて分析した結果、行動的評価には外見美と内的特性の両方が影響することが示された。平均得点についての分散分析の結果、幼児が両者に注目して行動評価を行なったことが示され、仮説①と②が支持された。この中で美ステレオタイプに矛盾する物語Ⅱにおいて、年長児は身体的魅力が低い人物に高得点を与えており、年長児の行動的評価は身体的魅力よりも内的特性の望ましさが影響を及ぼすことが示され仮説①と⑤が支持された。

また両年齢共にP特性人物の方がN特性人物に対する行動的評価よりも有意に高かったことから、幼児は対人関係を形成するにあたって内面的な要素にも注目していることが示された。詳しくみるとU外見において両年齢共に、P特性がT特性よりも、T特性がN特性よりも行動的評価が高かった。A外見においては年少児ではP特性がN特性よりも有意に行動的評価が高く、年長児においてはP特性とT特性がN特性よりも有意に高かった。年長児の行動的評価についての理由付けをみると、P特性N特性人物については内的特性に言及するものが多かったが、T特性人物については、内的特性と身体的特性に同程度に言及した。ニュートラルな特性であるにもかかわらず「やさしいから(遊びたい)」「いい子だから(遊びたい)」と良い方向に内的特性を付与する美ステレオタイプの影響がみられた。以上から身体的魅力が低い他者の場合、幼児は各特性を理解しやすいが、身体的魅力が高い他者には美ステレオタイプが現れた。両年齢共にP特性を理解するが、N特性については年長児では美ステレオタイプに影響されずに行動的評価をしていることから、幼児期において

はP特性の理解が早い段階から、次にN特性へと進むと考えられた。これらから仮説②と⑤の一部が支持された

以上より幼児期の行動的評価においては、外見美の影響が両年齢にみられたことから、一般的に身体的魅力などの外面的な要因が影響を及ぼすが、評価的価値を含む行動を表す他者に対して内的特性が強く影響し、加齢に伴いネガティブ特性の理解が進むと考えられよう。

<仮説⑥幼児期における行動的評価には好悪感情が強く影響するだろう>

幼児では感情的評価(対人感情)が行動的評価(対人関係)に影響を及ぼすことが明らかになった。好意感情をもつ他者に対する行動的評価が、非好意的感情をもつ他者に対する行動的評価よりも高かった。このことから好意感情と相互作用の進展には正の相関があると考えられ、先行研究とも一致し仮説⑥は支持された。

4. 外見美の評価と性格の評価の順序

物語Ⅱの分析から、年少児においては「外見美の評価が好意度を介して内的特性の評価(認知的評価)に影響する」という垣内モデルの妥当性が、年長児においては「外見美の評価と性格の評価が別々に好意に影響する」という松井らのモデルがあてはまることが示唆された。つまり幼児期の対人認知構造は垣内モデルから松井らのモデルへと移行することが推察された。

総合的考察

幼児期における対人認知構造の発達過程について総合的に考察すると、幼児も他者の行動特性から内的特性・パーソナリティ特性を理解するが、また美ステレオタイプをもつことも本研究より追認された。幼児期においては評価的価値を含む特性の理解が、評価的価値を含まない中立的な特性の理解よりも早い段階からできることが示唆され、具体的には、はじめにポジティブな特性理解が可能となり、次にネガティブな特性の理解へと進み、就学後、ニュートラルな

特性の理解が進むと考えられよう。

幼児期における対人魅力・対人好悪感情の決定因は、美しさなどの身体的・外面的な要因と性格特性などの内面的な要因のいずれとするかを分析したところ、美ステレオタイプの影響は強いものの、他者の行動から内的特性に帰属させる認知的評価を行なった後は、内面的な要因に基づいて感情的評価と行動的評価を行なうことが本研究より示唆された。幼児期の早い段階では美ステレオタイプが強く影響を及ぼし、外面的な要因が重要な決定因とされる傾向にあるが、発達と共に内的特性の理解が進み、美ステレオタイプによって形成された第一印象に後続の内的特性を柔軟に取り入れて人物像を次第に形成していく傾向が見られ、より顕著に内的特性を優位な決定因としていくことが本研究より示唆された。これにより、先行研究では明らかにされていない「幼児期における対人魅力・対人好悪感情の決定因は、美しさなどの身体的・外面的な要因と、性格特性などの内面的な要因のいずれを決定要因としているのか」という問題について、一つの方向性を提起した。

また幼児期における「外見美の評価と性格の評価の順序」について、幼児期においては「外見美の評価が好意度を介して内的特性の評価（認知的評価）に影響を及ぼす年少の段階から、外見美の評価と性格の評価が別々に好意感情に影響する年長の段階へと発達する」というモデルが示唆されたが、この認知的評価の順序については今後のさらなる検討が待たれている。

幼児の対人認知構造を理解することは、幼児期の対人関係を援助する上で重要なことといえる。幼児は5、6歳になると内的特性への理解が進み、常に行動情報を知覚するような身近な他者に対しては内的特性に基づいた対人評価を持ちながら他者と相互交渉していると考えられる。幼児の対人関係におけるいざこざやトラブルを援助する際には、葛藤が起こった原因の行動そのものに言及するより、年長児頃から他者の内面（意図や感情、内的特性）に注目させる

ことが有効であろう。年少児は外面的要因に左右されやすいとはいえ、対人認知構造は発達途上にあり、他者の外面だけでなく、徐々に内面にも注目させて内的特性への理解を促し、社会性の発達を援助することが必要と考えられる。また幼児の全人格の成長において重要と考えられる対人関係の発展に、好意感情が強く影響を及ぼすことから、保育者は好意感情の決定要因を見極めながら、幼児が自らの力で豊かな人間関係を築いていけるよう対人関係を援助することが望まれる。

引用文献

- Anderson, N. H. 1968 Likedness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of personality and social psychology*, 9, 272-279.
- Bradshaw & McKenzie 1971 目鼻口の変化によって作られた 16 の比較刺激および標準刺激(吉川左紀子・中村真・益谷真編 1993 『顔と心顔の心理学入門』サイエンス社より)
- Dion, K., Bersheid, E., & Walster, E. 1972 What is beautiful is good. *Journal of personality and social psychology*, 24, 285-290.
- Dion, K. K. 1973 Young children's stereotyping of facial attractiveness. *Developmental psychology*, 9, 183-188.
- 江川文成 1975 対人認知の発達 藤永保・高野清純(編) 幼児心理学講座 4 『社会性の発達』日本文化科学社 Pp73-102.
- 榎本博明 2004 対人関係に現われるパーソナリティ 榎本博明・桑原知子(編)『人格心理学』(財)放送大学教育振興会
- 原孝成 1997 幼児における友だちのパーソナリティの理解—自分と知っている子に対する友だちの行動予測 性格心理学研究, 5, 1-8.
- 林知幸 2004 行動予測から捉えた幼児の性格特性概念の内容 教育心理学研究, 52, 52-60.
- 広沢俊宗 1994 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自尊心の影響 関西女学院短期大学研究紀要 7, 143-152. (高木, 2001 より).

- 生熊讓二 1983 人間関係の帰属 斎藤勇(編)『人間関係の心理学』誠信書房
- 垣内理希 1996 美人ステレオタイプは存在するか 社会心理学研究, 12, 54-63.
- 神田久男 1990 人間関係論の基礎 神田久男・吉川政夫・宇田川一夫『人間関係論』同文書院 2-12.
- 川西千弘 1993 対人認知における顔の影響 心理学研究 64, 263-270.
- 松井豊・山本真理子 1985 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, 1, 9-14.
- 松井豊 1990 人間関係と性格 詫摩武俊ら『性格心理学への招待』新心理学ライブラリィ9 サイエンス社, 134-154.
- 松井豊 2001 親密な対人関係の形成と発展 高木修監修・土田昭司編『対人行動の社会心理学』北大路書房 94-107.
- 松本芳之 1983 対人認知の内容 斎藤勇編『人間関係の心理学』誠信書房 52-60.
- 松永あけみ 1995 幼児における他者の内的特性の把握と行動予測能力 教心研, 43, 204-212.
- 松永あけみ 2002 幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか 発心研, 13, 618-177.
- 村田光二 2004 社会的認知の過程 亀田達也・村田光二編『現代の社会心理学』放送大学教育振興会 119-130.
- 岡隆 1990 社会的認知 金城辰男(編)『図説現代心理学入門』培風館, 49-55.
- 斎藤勇 1987 対人魅力と対人好悪 斎藤勇(編)『対人社会心理学重要研究集2 対人魅力と対人欲求の心理』誠信書房 p2-54.
- 清水由紀 2000 幼児における特性推論の発達特性・動機・行動の因果関係 教心研, 48, 255-266.
- 清水由紀 2003 他者理解の発達過程—子どもは他者のパーソナリティ特性をどのように推論するのか—人間文化論叢, 6, 119-128.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBigFive尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67
- 山本真理子 2000 パーソナリティの認知 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井豊編『性格研究の広がり』ブレーン出版 65-82.
- Yuill, N 1992 Children's production and comprehension of trait terms. *British journal of developmental psychology*. 10, 131-142. (林, 2004 より)

謝 辞

研究にご協力いただきました保育園児の皆さんと、暖かい御指導を賜りました社会福祉法人金沢市社会福祉協議会・旭町保育園園長 田邊良美先生、小立野善隣館愛児園園長 吉田敬子先生と諸先生に心から感謝いたします。